〔中国陶磁―花の意匠―展によせて〕

「青花梅文皿」に描かれた梅と月の表現について

梅の花を描いた「青花梅文皿」（図１、２大和文華館蔵）は中国明時代末の天啓年間に製作された、青花（染付）の皿です。中央に大きく枝を伸ばした紅白梅とその上方に細く弧を描く月、そして「春」の文字があらわされています。静かな春の夜に、月の光にうっすらと照らされた梅が月と対話しているような穏やかで詩情豊かな情景です。ここでは画面の中心と梅の中心をややずらして置いています。梅は月に向かって手を広げるように上方と向かって右方向に枝を大きく伸ばし、右に伸ばした枝の対となる位置に「春」の文字が配された、バランスの良い構図となっています。月と文字のどちらが欠けても画面の中での梅樹の重心は傾いてしまうでしょう。月は一筆書きによる簡潔な表現ながらも、構図上重要な位置を占めています。同じく、明時代末の民窯で製作され多く日本に伝来している古染付の皿には、月または太陽を描き込む図像が多く見られます。山水風景画の中や羅漢・動物の頭上に描かれる月（または太陽）は、ほとんどが小さな円形で簡単に表現されていますが、構図や奥行き表現において画面の中では重要な役割を担っていると思われます。ここでは「青花梅文皿」における梅と月の表現に注目します。

古染付と呼ばれる明末の青花磁器に認められる特徴の一つに、粗放な筆使いによる絵付けが挙げられます。古染付の皿や水指の側面には山水や羅漢等の人物、鶏や馬といった動物、そして各種植物の図様が描かれていますが、これらは粗野とも言えるような大胆な筆致で生き生きと描き出されています。また、余白を充分にとった構図が多く見られ、青色の濃淡を効果的に用いた描写からは、叙情性豊かな雰囲気が感じとれます。このような絵付けは時に「絵画的」と称され、絵画との関連性が指摘されてきました。特に円形の皿は、表面全体や、または縁取りのように皿の周囲を文様で巡らせた内側が絵画画面のように構成されています。その自由な筆さばきによる簡潔な描写は見るものを和ませてくれるし、さらに上記のような平明で愛らしい画題にも古染付が長く日本で賞玩されてきた理由があると思われます。

大和文華館所蔵の中では花などの植物を題材とした古染付は比較的多く、鶏と鶏頭を描いた「青花釉裏紅闘鶏文碗」や桔梗を象った「青花桔梗形香合」などがあります。月（または太陽）の描き込まれた明時代天啓年間頃の作品は、「青花梅文皿」の他に「赤絵羅漢文皿」と「五彩柘榴文角皿」がありますが、後者二点は共に円の内部が赤く塗りつぶされているため、太陽をあらわしていると思われます。では、「青花梅文皿」について詳細を見ていきます。本作品は薄手の造りで、特に縁は尖るように薄くなるために釉薬は極薄くかかり、虫喰いと呼ばれる釉が剥げた箇所が見られます。畳付は釉を削いでいますが、砂状の付着物があり、器形はやや歪んでいます。裏面に染付による「天啓年製」の年款が二行で記されています。梅花は幹の中心に位置する四輪を幹と同じく潤沢な青花釉で塗りつぶし、それ以外の花を白抜きで描いて紅白の梅が表現されています。また、白梅はそれぞれ多方向の視点を取り入れた描き方に工夫が見られます。幹には強い調子の直線的な線を用いており、上空で柔らかな光を投げかける繊細な月へと筆使いが巧みに変化していることが見て取れます。月によって極端な近景と遠景が描かれ、空間的な広がりが画面に生じています。

早春をあらわす梅と月の組み合わせは本作品に限らず数多く見られる意匠で、古染付では鴛宿梅文の画題などにもよく月が描かれています。本作品とほぼ同じ図像の作例には梅樹とともに太陽と月を描き「独占先　春」（先がけて春を独占する）の文字を添えた「天啓赤絵梅樹図皿」（図３斎藤菊太郎『陶磁大系』45　1976年　平凡社より複写）や「赤絵青花梅樹虫文皿」（図４河原正彦『古染付』1977年　京都書院より複写）があります。前者は梅花の位置や向きは他の二点とほぼ同じですが、流動的な柔らかい線で描かれ、特徴的な筆使いをしています。後者の作例は、管見では他の資料には掲載されておらずモノクロ図版と表記から判断せざるを得ないのですが、特に本作品との興味深い関係が認められます。本作品と「赤絵青花梅樹虫文皿」は梅樹の表現が幹の屈曲や梅花の位置などの図様において酷似し、描線の調子も良く似ています。中央の横に三つ並んだ梅花の上方に突き出たM字形に強調された枝も共通して見られます。器の大きさがわずかに異なり、器表面の内側の円圏が本作品は二重線であるのに対して他方が単線で引かれている違いはありますが、両作品が同じ画工によって青花が施されたのか、または同一の範に基づいて図像が描かれたのかといった極近しい関係にあることは確かだと思われます。「赤絵青花梅樹虫文皿」は古染付に緑と赤の彩色を施したいわゆる天啓赤絵の作品で、梅樹の周囲には虫が飛び回る華やかな図像となっています。ここでは月や「春」の文字の位置は本作品と同じですが、それぞれが弧を描きながら円形の画面内に広がる枝の影に隠れてしまっています。本作品では皿の表面は二重線で内外に区切られ、梅樹の周囲には十字文様を持つ円文を六つだけ配してやや中途半端に感じられますが、「赤絵青花梅樹虫文皿」では釉上彩で彩られた円文も含めて十二文で一巡しています。このことより、本作品も同様の図像を想定して青花が施されたが、何らかの理由によって釉上彩が施されずに日本に渡ってきたと考えられます。しかしそのために、本品ではかえって月の存在が際立ち、春の情景は単色の濃淡によって落ち着いた雰囲気となり、余白からは澄んだ空気までも伝わってくるようです。

古染付と、平行した時期に製作されていた天啓赤絵との作品の比較により、さらに多くのことがわかるのではないかと考えます。（瀧朝子）

図１　青花梅文皿

図２　底面

図３　天啓赤絵梅樹図皿

図４　赤絵青花梅樹虫文皿

季刊 美のたより №142
平成15年４月４日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.